

学級活動の充実を図る指導の工夫

—子どもが生き生きと取り組む話し合い活動の指導と評価の工夫を通して—

葛城市立新庄小学校 教諭 遠藤 孝晃

Endo Takaaki

要 旨

子どもたちによる学級や学校の生活の充実と向上を図るという学級活動(1)の内容を達成するためには、子どもたちが互いの考えを尊重しながら見通しをもって話し合いを進めることが必要である。そうした話し合い活動の経験から、子どもたちは、「この学級が好きだ。」「友達と共に学級をつくりたい。」という気持ちや自信を高めていく。子どもたちの自発的・自治的な話し合い活動がより活発なものになるよう、指導の工夫や指導に生かす評価の在り方を探った。

キーワード： 特別活動、学級活動、話し合い活動、計画委員会、評価規準、指導の工夫

1 はじめに

特別活動の中でも、とりわけ、学級活動の内容(1)は、子どもたちが強い関心をもって積極的に取り組もうとする活動である。しかも、そこで養われる自発的・自治的な態度は、将来子どもたちが社会生活を営む上で必要な「生きる力」に直接つながるものである。

そこで、学級活動の話し合い活動において、互いの意見を尊重しながら見通しをもって話し合い活動を進める力を子どもたち一人一人に付けていきたいと考える。そのために、指導者が、学級集団全体の高まりを評価するとともに、子どもたち一人一人の力について評価、分析し、評価したことを一人一人の子どもに返すことによって指導を深める工夫を目指し、研究を進めることにした。そして、子どもたちの話し合いの力や学級への所属感、連帯感を高め、より自主的・実践的な態度を育てたいと考えた。

2 研究目的

子どもが生き生きと取り組む話し合い活動の活性化を目指し、指導の工夫や評価の生かし方について考察する。

3 研究方法

4月の学級開きで、どのような学級にしていきたいかを出し合い、学級目標を決める話し合いをもった。話し合いの当初は、積極的な意見交換はあまり見られなかったが、指導者が意見を求めると、子どもたちから、「こんな学級にしたい。」という考えや願いがたくさん出てきた。そして、子どもたちは、願いをつなぎ合わせ、まとめることで学級目標をつくり上げることができた。その後、何度かの話し合い活動を観察する中で、活発に意見が言える子どもとそうでない子どもの差が大きいことが、指導者には感じ取れた。発言の少ない子どもに聞いてみると、その多くが、人前で自分の考えを表現する経験が少ないためにはずかしいと感じたり、自分の考えが間違っていて否定されるのではないかと思ったりしていることが分かった。また、提案理由を大切にしながら発言する子どもが少ないために、話し合いの方向性が定まらなかったり、

話し合いが深まらなかったりすることも分かってきた。

以上のような実態を踏まえ、計画委員会から話し合い活動、そして振り返りといった流れのそれぞれの場面で手立てを工夫すること、一人一人の子どもの高まりや課題を見取って次の指導に生かすことのできる評価を進めることを目指し、次のような点に留意して研究を進めることにした。

- 学級活動の評価規準の作成および評価の場面や指導の手立ての工夫
- これまで軽視しがちであった計画委員会への指導の重視
- 一人一人の子どもに対する評価とそれに応じた指導
- ワークシート類の充実
- 学級活動と学級活動以外の時間の関連付け

4 研究内容

前述した課題に沿って、以下のような研究内容を設定し、一つ一つ具体的な取組を進めることとした。

(1) 評価規準の作成と指導に生かす評価の在り方についての研究

ア 評価規準の作成

まず、評価規準の作成から取りかかった。

これまでの評価については、各学年や学級で個別に考えていたため、学校として一貫性のある評価規準がなかった。そのために、子どもたちの所属学年が上がっても、見通しをもった指導の積み上げができていなかった。教員集団として、組織的・系統的な指導ができていなかったとも言えるであろう。

そのような反省点をふまえ、低・中・高学年とそれぞれの発達段階に応じて、目標を段階的に高めていけるように考え、表1に示すような話し合い活動の評価規準を設定した。この評価規準は、何度かの手直しを経て、現在のものになっている。

イ 高学年における評価の場面、方法、指導の手立て

次に、作成した評価規準を基にして、評価の場面や方法、指導の手立てについて考えた。

評価を次の指導に生かすことができるように、具体的な場面を考えながらまとめた。

詳しい内容については、表2に示したとおりである。

表1 話し合い活動の評価規準

観点	1, 2年	3, 4年	5, 6年
関心・意欲・態度	話し合いの問題を教師の助言で見つけようとする。	身近なことからみんなで話し合って解決すべき問題を見つけようとする。	学級や学校生活の充実と向上を目指した議題を見つけようとする。
思考	決まった議題に対して関心をもつ。	決まった議題に対して関心をもつ。	議題に対して自分の考えをもとうとする。
判断	自分から話し合いに参加しようとする。	自分たちの力で話し合いを進めようとする。	友達と協力して話し合いをスムーズに進めようとする。
技能	みんなと話し合いたいことを探して選んでいる。	学級生活から議題を考えている。	学校や学級生活の中から議題を考えている。
表現	議題に対して自分の意見をもっている。	議題に対して理由付けしながら自分の考えをもっている。	話し合いの結果や活動を見通した考えをもっている。
知識・理解	友達の意見と自分の考えを比べている。	話し合いのめあてや友達の意見を合わせて考えを深めている。	自他の意見を認めながら、更により解決方法や活動の仕方を考えている。
	教師と相談しながら、話し合う内容や順序を考えている。	意見を予測しながら、話し合いの計画を立てている。	安易な多数決を避けるなど、状況に応じた司会進行ができるように話し合いの計画を考えている。
	簡単な理由を付けて提案することができる。	提案理由を明らかにして、提案することができる。	友達に分かりやすく伝えるような工夫を加えながら、提案することができる。
	自分の考えを発表し、友達の意見をきちんと聞くことができる。	友達に分かりやすいように、理由を明確にしながらい意見を言うことができる。	理由を明確にしたり、資料を提示したりしながら自分の考えを効果的に表現することができる。
	話し合いの簡単な司会進行をすることができる。	話し合いの計画に沿って司会進行をすることができる。	計画に沿って司会進行をし、時間の経過や、状況に応じて話し合いを進めることができる。
		話し合ったことを正確に記録することができる。	話し合ったことを要点をおさえて分かりやすく記録することができる。
	議題を知り、話し合いの進め方や決め方が分かる。	議題の提案の仕方や話し合いの進め方が分かる。	議題提案から話し合いの結果の活動までの組み立て方や、複数の意見をまとめるなどの効果的な話し合いの進め方が分かる。
	意見の言い方や聞き方が分かる。	意見の言い方や聞き方、まとめ方が分かる。	友達の意見を聞いて自分の考えと照らし合わせることで、よりよい解決方法が見つかることに気づいている。

表2 話し合い活動の評価規準（5、6年）と評価場面、方法、指導の手立て

	評価規準（5、6年）	評価場面	評価方法	指導の手立て
関心・意欲・態度	学級や学校生活の充実と向上を目指した議題を見付けようとする。	・事前	・活動の観察 ・議題案カード	・個々のつぶやきや子どもたち同士の話からも素材を見付けられるよう助言する。 ・議題選定の基準を示し、学級活動の時間に採り上げなかった議題案についても、提案者が納得できるような返し方をする。
	議題に対して自分の考えをもとうとする。	・事前 ・話し合い	・学活ノート ・活動の観察	・子どもたち一人一人が議題や提案理由をきちんと理解できるような場を設定する。 ・司会の子どもたちとの打合せを綿密にし、発言を促す言葉がけができるようにする。
	友達と協力して話し合いをスムーズに進めようとする。	・話し合い	・活動の観察 ・学活ノート	・自分の意見を大切にしようとする気持ちにも配慮しながら、決定に至るためには、譲歩することときには必要であることを助言する。
思考・判断	学校や学級生活の中から議題を考えている。	・事前	・議題案カード ・活動の観察	・広い視野で議題を見付けられるように、普段から、学校内でのできごとなどの情報交換をする場を設ける。
	話し合いの結果や活動を見通した考えをもっている。	・事前 ・話し合い	・学活ノート ・活動の観察	・活動の実施時間や場所、対象が決まっている場合には、カードにして示すなどして意見の根拠になるように工夫する。
	自他の意見を認めながら、更により解決方法や活動の仕方を考えている。	・話し合い	・活動の観察	・提案理由や話し合いのめあては、目に付く所に掲示するなどして、いつもそこに立ち返れるように習慣付けをする。
技能・表現	安易な多数決を避けるなど、状況に応じた司会進行ができるように話し合いの計画を考えている。	・計画委員会	・活動の観察 ・司会ノート	・議題に応じて、司会がまとめるべき点や意見の譲り合いを促すといった方法などについて、計画委員会において、教員も入ってていねいに話し合うようにする。
	友達に分かりやすく伝えるような工夫を加えながら、提案することができる。	・話し合い ・計画委員会	・活動の観察	・提案理由の中でも特に友達に理解してもらいたい部分を分かりやすく説明できるように助言する。
	理由を明確にしたり、資料を提示したりしながら自分の考えを効果的に表現することができる。	・話し合い	・学活ノート ・活動の観察	・国語科やその他の教科においても、話し合いの仕方の技能を高められるようにする。具体物や資料の活用も活用できるようにする。
知識・理解	計画に沿って司会進行をし、時間の経過や、状況に応じて話し合いを進めることができる。	・計画委員会 ・話し合い	・活動の観察 ・司会ノート	・計画委員会で、話し合いの柱立てや時間配分に無理な点がないか十分に検討するよう促す。 ・多様な意見に対応できるように、綿密な打合せを行うようにする。
	話し合ったことを要点を押さえて分かりやすく記録することができる。	・計画委員会 ・話し合い ・事後	・記録ノート ・活動の観察	・他の教科・領域においても、赤ペン或利用や図示などを取り入れ、分かりやすい記録が残せるように経験を積み重ねておく。 ・話し合い後に、ノートの記録に改善できる点はないかを見直す指導をする。
	議題提案から話し合いの結果の活動までの組み立て方や、複数の意見をまとめるなどの効果的な話し合いの進め方が分かる。	・計画委員会 ・話し合い ・事後	・活動の観察	・議題提案から話し合いまでの流れなどを掲示して、理解しやすい環境をつくる。 ・他の教科・領域においても、話し合いを経験する場をできるだけ確保する。
	友達の意見を聞いて自分の考えと照らし合わせることで、よりよい解決方法が見つかることに気づいている。	・話し合い ・事後	・学活ノート ・活動の観察	・普段から、友達の発言を素直に受け止めることができるような友好的な友達関係を育てるように努力する。

指導の手立てについては、これまでは、指導者からの助言という形をとることがほとんどであった。そこで、可能な限り多くの場面で、言葉で伝えるだけで終わることのないような工夫を考えた。以下に、その手立ての工夫をまとめた。

- 話し合いまでの活動の流れの掲示
学級活動コーナーに「議題集め」から「話し合い」に至るまでの流れを掲示して、計画委員会の活動に見通しをもたせた。
- 提案理由などの提示方法の工夫
学級の全員が提案理由を大切に話し合いを進められるよう、提案者はカードに提案理由を書くよう指導した。特に、みんなに注目してほしい部分には赤色の下線を書き入れさせた。
- 学級活動ノートの工夫
学級活動ノートの振り返りの部分に、「今日のスターさん」の欄を設け、子どもたちが話し合い後の感想を交流する際に、そのことについてふれさせるようにした。自分がかんばったことを学級の友達に認められることで、子どもたちが更に自発的・自治的に話し合いを進めていこうとする気持ちにつながると考えたからである。
- 学級活動と帰りの会の時間との関連付け
帰りの会に、委員会や部団登校、1年生の給食と掃除の手伝いなどで子どもたちが感じていることを交流し合う時間を設けた。高学年として広い視野で話し合いを進めるための一つのきっかけにするとともに、同じ苦労や喜びを感じている友達に共感することで、同じ学級の一員であることの意識付けが期待できると考えたからである。
- 計画委員会の活動の充実（後述）

(2) 計画委員会の活動の充実

これまでも、子どもたちは計画委員会を行ってきた。しかし、子どもたちが議題集めから全体での話し合いに至るまでの計画委員会や計画委員に対する手立てを、指導者があまり重視してこなかったという実態があった。

そこで、子どもたちが計画委員会の活動を見通しをもって自発的に進めていけるように、以下のようないくつかの手立てを指導者が行った。

○ 活動の流れの掲示と段取りの説明

前述の通り、学級活動コーナーに常設した。

○ 議題選定の基準の明確化

これまで、議題選定の判断基準が子どもたちにとっては分かりにくいようであった。そこで、議題選定のよりどころとするカードを子どもたちに持たせ、判断しやすいようにした。議題選定について十分に話し合うことは、学級活動の話し合いに対する見通しをもちやすくすることにも役立つと考えた。カードに示した議題選定基準は、以下の4点である。

① 学級や学校生活を楽しくよりよいものにするもので学級みんなの問題であるか

② みんなの力で解決できるか（個人のプライバシーにかかわる問題ではないか、校時を変更したり学校施設を使ったりすることではないか、お金がかかることではないか、危険を伴うことではないか）

③ 今すぐ話し合うべき議題か、もう少し後でもよい議題か

④ 学級活動の時間に解決すべき問題か（朝の会や帰りの会の利用で話し合いができないか）

○ 話し合いの進め方シートの改善

このシートは、これまでも計画委員会で利用させてきたものである。今回は、より円滑に話し合いを進められるように、少し修正を加えた。例えば、シートに「司会者がよく使う言葉」という欄を設けた。その欄を利用して、できるだけ多くの意見を引き出し、意見を比較したり統合したりし、まとめて決定に導くという司会者の役割についても、子どもたちが具体的にイメージできるようにした。

○ 時間の確保

学校の様々な場面で、その中心となって活動することが多い6年生は、とても忙しい毎日を送っている。それは指導者も同じで、ふと気が付くと目の前に学級活動の時間が迫っているということがあった。指導者がしっかりと見通しをもち、計画性をもって計画委員会の時間を確保できるように努めた。

(3) 個々の指導に生かす評価と話し合い活動の実際

ここでは、実際に行った話し合い活動の例から、個々の指導に生かす評価の在り方を中心に考えたい。

子どもたちが、望ましい集団活動を通して学び、様々な力を付けていくのが特別活動である。しかし、指導者が集団全体の状況や高まりばかりに目を奪われていると、ともすれば一人一人の子どもの置かれている状況や課題をつかめずにいることが起こってくる。指導者が4の(1)イで述べたような指導の手立てを行うことや、個々の子どもに対する評価を生かした指導することによって、子どもたちが、次のような力を付けることができると考えた。

① 話し合い活動に対する自信や手応えを感じ、更なる意欲をもつことができる。

② 活動全体に対して時間的、空間的、心情的な見通しをもち、時間を上手に使うことができる。

③ 「自分にとってよくて、みんなにとってもよい」解決の方法を考え、話し合うことができる。

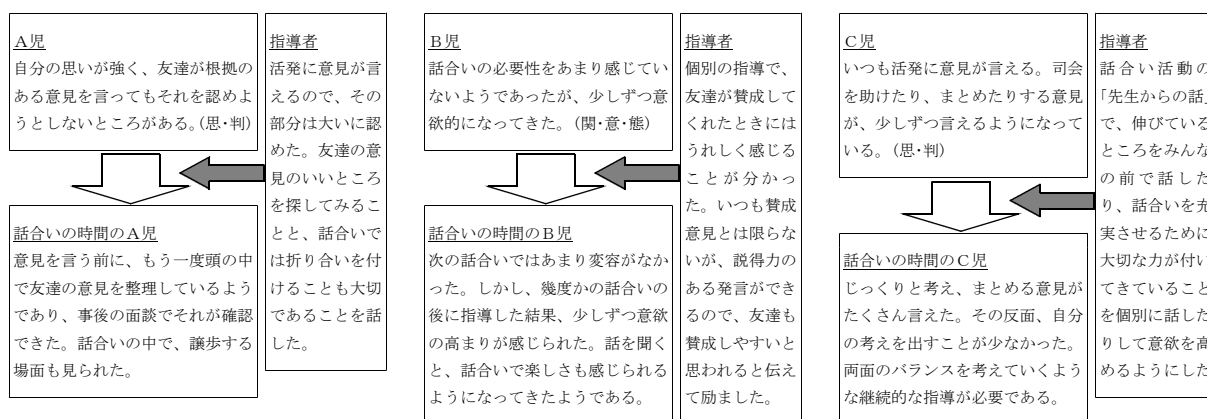
④ 互いの意見を尊重しながら話し合うことで、学級集団全体の中で、より友好的で深い人間関係をつくることができる。

ア 子どもたち一人一人が置かれている状況の把握

まず、評価規準に照らして、計画委員会や話し合い、話し合いの振り返りの場面をとらえて、一人一人の子どもが、今、どのような力を付けていて、どのような力が必要なのかということの評価をしていった。その方法としては指導者の観察が中心であったが、議題案カードに書かれていることや、学級会ノートに書かれている意見（考えてきたこと）や自己評価（振り返り）なども大切にされた。また、個々の子どもとの面談もとり入れ、できるだけ客観性や信頼性をもたせられるように工夫した。

イ 評価を生かした指導の実際

次に、評価に基づき、次回の話し合い活動までに重点的に指導する子どもを2、3名選び出した。評価規準に照らして力を付けていない子どもはもちろんであるが、今まさに伸びようとしている子どもにも注目した。そして、話し合い活動の「先生からの話」の時間に、対象の子どもを大いにほめたり、個別に話をしたりして次の話し合い活動につなげられるようにした。具体例をいくつか挙げておく。



ウ 「学級歌をつくろう」の取組から (11月)

本来、一学期の学級開きの際に出てくるような議題である。しかし、残り少ない学級生活をより充実したものになりたいという気持ちが提案理由に込められていたことが、議題選定のための決め手となり、議題として決定された。指導者としては、この話し合いで「こんな自分たちでありたい。」という意見交換をすることで、卒業に向けてより充実した学級生活を送り、子どもたち一人一人が目標とする6年生像に近づこうとすることにもつながっていくと考えた(表3)。

さて、個別的な指導ということで、今回の話し合いで注目したのは、D児とE児の二人である。

D児は、みんなが納得できるような説得力のある考えをもっているにもかかわらず、考えを整理して話すことが苦手である。また、意見を言うと友達に何か言われるのではないかと心配するようなどころがあった。そのために、それまでほとんど発表できずにいた。

指導者の手立てとして、D児には、普段の生活の中で認められる発言があれば取り上げてほめることを心がけ、実際、それができる場面が何回かあった。残念ながら、本議題の話し合いでは、D児はほとんど発表できずに話し合いを終えた。しかし、事後の面談では、もう一歩で手を挙げられる場面がいくつかあったことや、次

話し合いの議題	話し合いのあて		
学級歌をつくろう!	1人1人が自分の意見をまた学級会にしよう		
案	みんなの大きな目標になる歌をつくりたい		
理由	卒業前までに、みんな覚えて歌い、最後の大きき思い出にしたい。		
係	司会(N) 副司会(S) 黒板(Na, Ni) ノート(Yo)		
話し合いのあて	1人1人が自分の意見をまた学級会にしよう		
①初めのことば	②議題の確認		
③話し合いのあての確認	④提案理由の説明		
⑤話し合いの順序の確認	⑥話し合い		
話し合いの順序	時間	予想される意見	準備・役割等
①歌に入れる言葉		6月16日、こたわ、卒業目標	
文を考える(出)	5分	やる気、勇気、仲間、元氣	
歌詞を(は)る	15分	遠藤先生、信じる、明るい	
みんなに(大)意	2分		
②曲(歌)の(決)め		→後日	
何人か(決)める		→担当者を決める	
遠藤先生に(決)め			
③大(決)定(決)め	5分 (第3セ33)		名前シテ

表3 活動計画

にはがんばりたいという気持ちがあることを伝えてきた。そして、その言葉どおりに、次の話し合い活動ではそれまでとは違って少し積極的に発言をし、その意見の一つが多くの友達の賛同を得た。その喜びから、更に意欲的な気持ちももてたようである。

E児は、本議題の提案者であり、学級に対して強い所属感や愛着心を持ち、学級目標を決めるときには意欲的に意見が言えた。しかし、それ以降の話し合いでは、恥ずかしいという気持ちが強いため自分の考えがあっても発表につながらないことが多かった。E児は、行動面では徐々に積極性を発揮し始め、運動会のマーチングでは指揮者に立候補して立派にやり遂げるという経験をした。だからこそ、E児には、友達の前で自分の考えを出して確かな手応えを得て、更に学級や学校生活の諸問題に関して自分の考えを表現してほしいと考えた。

そのようなE児に対して指導者としては、行動面と同様に学級のことを考えたり自分の考えを話したりする力をもつことの大切さを話し合い活動の事前に個別の面談で伝えた。また、E児と仲がよく、話し合い活動において自主性が身に付きつつあるF児からE児に対して、がんばるように声をかけてもらった。この事前の指導はE児の心に強く響いたようで、話し合いでE児は大変意欲的で、「短い期間だけど、〇〇のような学級にしたい。」という意見をたくさん言うことができた。友達から、「今日のスターさん」として名前が挙がっていたこともE児にとってはとてもうれしく、周りから認められている自分というものを実感していた。

5 考察と今後の課題

子どもたちが自発的・自治的な話し合いを展開するために、指導者が子どもたちに付けたい力には、本当に様々なものがあることが、今回の研究を通して改めて分かった。そして、子どもたち一人一人が、今の段階で伸び悩んでいるのか、逆に、どの部分で大きく力を付けようとしているのかを指導者が把握する、つまり評価して見取っていくことが、子どもたちに力を付けていく上で大変重要であることも分かった。

そのために、適切な評価規準が必要不可欠であることは言うまでもない。だれが評価してもズレの少ない評価をするためにも、学年段階に応じた評価規準の必要性は大きいと考える。

子どもたち一人一人に対する評価に基づき、個に応じた指導をしていくことで、子どもたちは伸びていく。最も効果的な場面で、手立ての工夫を考えて指導することによって、先に挙げた、自分の発言に対する確かな手応えや自信、活動全体や話し合いにおいて見通しをもつ力など、子どもたち一人一人が目指すべき力を確実に身に付けていけるということが実感できたことは、大きな成果であった。

これらの様々な力が総合的に高まってきたときに初めて、子どもたちは自分の存在意義を感じたり、学級や学校に対する所属感を感じたりするのだと思う。そして、自分の学級や学校のためであるからこそ、自発的・自治的に話し合い、活動しようと考えていくのだと思う。同時に、話し合いを通して友達の意見を認めたり、自分の考えが認められたりすることで、学級全体の一体感が生まれ、友好的な人間関係が育っていく。一年間という期間を通じて、一人一人の子どもに対する指導を効果的に行うことで、自主的・実践的な態度が、少しずつ育っていくものと考えている。

本研究は、まだ、発展途上のものである。特に、指導の手立ての工夫という部分では、まだまだ多くのアイデアが必要である。指導者が、子どもたちの心に強く響く効果的な仕掛けを考えていくことで、子どもたちは、更に自発的・自治的な話し合い活動を展開していくと考える。

研究の成果は大きく、話し合い活動にも少しずつ高まりが感じられるようになってきた学級集団である。今後も、指導者がしっかりとしたねらいや見通しをもち、社会生活を営む上で必要な「生きる力」につながる、自主的・実践的な態度を育てられるような取組を重ねていきたい。